

総合討論

藤田高夫氏——最後に、全体を通じてのコメントということで、東京大学の村井章介先生にお願いしたいと思います。先生お願いします。

村井章介氏——それでは、全体の総合討論のためのコメントということでお話をさせていただきます。何せご報告はベトナム、朝鮮半島、琉球という3つの地域にわたっておりまして、中国の周縁地域という点では共通性があるわけですが、時代的に見ると2世紀から19世紀、領域的にも歴史学と考古学にまたがっているというような、専門性の高いご報告のそれぞれについて、何か意味があるような質問が出せるのかというと、まあ無理だといわざるをえません。仕方がありませんので、素人として伺って、そして私の問題意識にひきつけていくつかテーマを立てて、コメントにもならないようなものをお話するというので、責をふさがせていただこうと思います。

5つくらいあるんですけども、まず1番目に、これはこのシンポジウムのメインテーマだと思えますが、中国ファクターをどうとらえて周縁世界を見るのかという問題です。とくにそこには史料の問題があると思うんです。

ベトナムにしても他の地域にしても、前近代では漢文史料がどうしても中心にならざるをえないわけで、漢文で書かれるということのなかに、すでに中国の要素が入ってきてしまっているわけです。それから、史料の書き方の範例も、史記・漢書といった中国の歴史書編纂にあるわけですから、そういうなかで残された史料から、中国バイアスができるだけ相対化して、独自の要素をどうやっ

てとりだせばいいのでしょうか。

たとえば、律令という問題にしても、たしかに日本の律令は唐のそれと非常に近い体系をもっていますけれども、それが即、同時代の日本社会の状況に対応しているかということ、そうじゃないだろうということが、日本の古代史研究のなかで明らかにされてきているわけですね。そうとう背伸びして受容していることはたしかです。

そうなると、中国風のを背伸びしてうけいれ、自分のところにもあるよと強調したいという心理が働くでしょう。桃木報告でとりあげられた地方制度の名称なんかもその例じゃないか。そういう史料のあり方にあらかじめ内在している〈中国〉をどうやって相対化するかという、方法的な課題があると思います。

それから、それと関係するんですけども、やはり中国文化というのは、東アジアの周縁世界にとっては絶対的な参照系ともいべきものだと思うんですね。

最近ちょっと考えているのが水墨画のことなんですけれども、何で見たこともないようなあめした風景ですね、それを日本人が、おそらく朝鮮人もベトナム人もそうだと思うんだけど、営々として描き続けるのか、不思議でなりません。雪舟という画家が出てきて、天橋立という実在の日本の風景を描いたことが、何か非常に特別なことのように語られる。たしかに特別なことなんですけれども、何でそれが特別にならざるをえないのか、というような問題があると感じております。

前近代の東アジアの周縁地域の文化をどうとら

えるのかというときに、中国以外にどういう参照系がありえたのかが問われなければならないだろうし、独自性を強調したがる心理はよくわかるわけですが、はたして何か独自のコアがそれぞれの文化のなかに存在するのか自体が、はっきりしているわけではないように私には思えてなりません。とくに日本文化史ではすぐに固有だとか日本的だとかいうわけです。国風文化という言葉が典型的ですが、外来的な要素が薄れると、本来あった何か日本的なものが再度あらわれる、というふうなことをいいがるわけです。

じゃあその中身は何なのかと考えてみると、これがさっぱりわからない。ラッキョウの皮をはぐような感じで、つきつめていくと何も残らないような気がしてなりません。いわゆる固有とは何なのかを、日本だけではなくて、各地域のそれぞれのあり方に即して、考える必要があるのではないかということ強く感じました。

つぎに2番目は、今の問題とかかわるんですけども、周縁の諸国家がそれぞれ独自の国際秩序を志向するという点についてです。この問題をとくに中心的にとりあげられたのが、チョンさんのお話だったわけですが、どの報告にも共通して孕まれている問題でもあると思うんですね。中国に似せて、みずからを中心とする国際秩序を生み出そうとする動きは、どこにでもあるわけですが、ただそれが、ほんとうに中国と同じようなものを実際につくり出せたのかというところじゃない。高句麗の場合には、中国風の徳化という要素よりは、力で押さえつける傾向が強いということで、これは非常におもしろい指摘だったと思います。

じつは、私が最近やっている16世紀の琉球の場合ですが、尚真という王が登場して国家体制を整えるなかで、南九州の諸勢力を、島津氏の諸家を

含めて、みずからを中心とする国際秩序のなかに編成しようとしていました。そのことを私は発見した、琉球という小さな存在においてさえも、そういう志向性を持っていることを見出すことができたと思っています。現実には島津氏の覇権という動きのなかで摘みとられてしまうわけですが、実際そういう動きが存在したことは事実だと思います。

チョンさんのお話では、朝鮮王朝がみずからを小中華として境界領域を押しやえようとした動きを、対馬と女真についてとりあげられたんですけども、やはりあまりにも朝鮮側から見た視角に偏っているのではないのでしょうか。コメントでも指摘されましたように、女真というのは明の境界領域でもあるわけですね。ですから、明が女真をとらえるのと、朝鮮が女真をとらえるのとが、どう接合されていたのか、というような問題が当然あるわけですね。

さらにいえば、女真の側から見て、明なり朝鮮なりに編成されることにどういう意味があったのか、すなわち境界側から中心を見る視線も探っていないと、偏った歴史認識になるんじゃないか。極端には、朝鮮が女真や対馬を領土としていたというようなとらえ方に陥る危険はないだろうか、などと思えてならないわけです。

それから、3番目なんですけど、いずれの地域にも王権と呼べるようなものが登場して、それぞれの立場で国内や国外を編成しようとするわけで、その王権の核心部分をどうとらえるのかについての比較史的な考察が必要だ、ということが指摘されたと思います。

王権というのは、国家意志が最終的には王の決断として発出されるシステムだと思いますけれども、豊見山さんのお話は、それが実際にどういう形で行なわれていたのかを明らかにしました。た

たとえば琉球の辞令書ですと、文面からは最終結果としての王の意志しかわからないわけですが、実際にそれが導き出される過程で、僉議（せんぎ）という臣下たちの合議体による議論があったということなんですね。

そこで連想するのは『朝鮮王朝実録』です。あれはほとんどがそういう議論で満たされているような書物ですけれども、ああいうものが日本ではどうだったのでしょうか。日本の王朝国家では陣定（じんのさだめ）という公卿たちの会議がありまして、中世になると形式化するんですけども、天皇の意志として最終決定がなされるシステムであることは、鎌倉時代になっても変わりません。そういう、いろいろ比較史的なテーマが湧いてくるように思って、興味ぶかく拝聴いたしました。

さらにいいますと、各地域の宮殿プランに関する比較史的な考察をヤンさんが行なわれて、その比較のための条件設定にさらに考えるべき問題がある、というのは西谷さんがご指摘されたとおりでと思うんですが、論自体は興味ぶかくお聞きしました。その宮殿プランから核心部分をとりだして、その展開を各地域の歴史的条件のなかでどう理解したらいいかという、筋道としてたいへんおもしろい内容であったと思います。

ただここでも、さきほどの固有とは何か、ということと関係するんですけども、範型が唐とか北魏とかその辺にあって、それが各地域で参照されて自分たちのものを作っていくという際にですね、高句麗とか渤海による変形がいったい何によって生じるのか、ということが結局よくわからないんですね。

そこで、たとえば日本史だと、いったん中国をうけいれたんだけど、かならず〈日本的なもの〉にひき戻される、みたいな説明で済ませてしまうんですね。朝鮮でも他の地域でも基本的に同

様ではないかと思いますが、それでいいのか。高句麗的とか渤海的なものとはいったい何なのか、ということについて、やはりそれなりに説明がほしかったという気がします。

つぎに4番目ですが、清水さんのお話で、自分のやってきたことと関係でおもしろいと思ったのが、詩の問題ですね、外交における詩というものがいったいどういう役割を果たすべきものとして存在したか。とくに19世紀のベトナムと朝鮮との交渉を伝える史料の圧倒的な部分が詩である。詩でしか残ってないケースが多いということ、どう考えたらいいのかという問題がありそうな気がします。

昔私が手がけたことがある史料で、1420年に朝鮮使が日本にやってきたときの『老松堂日本行録』という記録も、中核部分は詩なんですよ。しかし、詩というのは扱いやすい対象じゃないから全部落として、『老松堂』では散文の序のほうにおもしろい日本観察があるので、それだけをあげつらう結果になりがちなわけです。

その結果、なぜ外交のために他国に赴いた人間が、記録を詩という形で残さなきゃならんのかという基本的な問題が残ってしまっています。そのためには詩そのものを史料として分析しなければなりません、それがむずかしい。なかでも、詩しか残っていない場合にはどうしようもなくなる、と思っていたんですね。

これは私自身がちゃんと解決しなければならなかった問題だと思うんですが、外交の場で生み出される漢詩そのものを、東アジアの外交なり国家間関係なり文化交渉なりを解明するたるめの有効な史料として、使いこなすことができなければ、東アジア外交の全体像はわからないだろう、ということを感じました。

それから、最後の問題として、考古学のご報告

は、私の手におえるような内容ではないのですが、一つ西村さんのお話で興味ぶかかったのが、ドンソン文化の銅鼓に関するご指摘です。銅鼓がそうとう広い範囲に分布しているのだけれども、それはドンソン文化がそこに根づいた、ドンソン文化圏にその東南アジアの広範囲が入る、ということとは違う。むしろその広がりに対応するのはサーフィン文化であって、サーフィン文化という海に親しい文化を担った人たちが運んでいった結果、ドンソン文化の銅鼓があちこちに残っているのにすぎないのだ、と主張されました。

交易による商品の広がりというような形で理解したほうが良いというご指摘は、とてもおもしろいと思うんですけれども、もしそれでいくとしたら、これまでのいわゆる文化圏というものを認識する方法はどうなるのか。物が出た範囲を楕円で囲んで、これが何々文化圏です、といていたのがなりたたなくなってしまうと、文化圏っていったい何がそろったときに設定できるのかという、原理的な問題に戻ってくるわけですね。物だけじゃなく、それを伝えた人たちもふくめた複合的な文化のあり方が、ある地域にあるのかなのか、というような指標が、たぶん必要になるんだろうと思いますが、それは口で言うのはやさしいですけれども、実証するのはたいへん困難だろうという気がいたしました。

それから、そもそも文化圏というようなある広がりや、かなり均質な空間としてとらえること自体が可能なのかと問題もあります。いろんな類似性を手がかりにして、ある空間のなかで関係性の束を想定していくという方法が、どこまで有効かということです。石井さんのとりあげた琉球瓦の系統の問題もしかりですね。南宋の瓦の要素が、はるか下った琉球の近世瓦に出てきてしまうというように、意外に近いつながりが見えてしまう。

つまり、時間的にも空間的にもかけ離れたところにも影響が及ぶというような、文化の広がりやのあり方ですね。そういうものをとらえるてだてが、従来の文化圏論というようなもの以外に何かありうるのか。今のところはまだ十分にはないと思うんですけれども、そういうものを生み出していかないと、真に文化圏論を克服することにはならない。否定的な研究はいろいろとできると思うんですけれども、新たなとらえかたを見出すことにはつながっていかないのじゃないか。そんなことを感じました。

だいたいこんなところでございます。どうも失礼いたしました。

藤田高夫氏——はい、どうも村井さんありがとうございます。ありがとうございました。

実は最初に御指摘された中国ファクターというものを、どう相対化するかというのは実は全体討論の大きなテーマとしても取り上げようと思っておりましたので、これはちょっと最後のほうに少し残そうかと思えます。

あと、幾つかの項目について、具体的な発表を踏まえながらの御指摘がございました。2番目の問題だったと思いますけれども、周縁国家が独立の秩序というのを指向する際に、その周辺、その周辺のそのまた周縁地域というのを見ていく際に、それぞれ位置づけというんでしょうけれども、その際に周縁、それぞれから見られた、この場合は女真の例をお出しになりましたけれども、境界の側から見た中心という視点が抜けてしまうと、少し偏った、ある意味危険なものになるんじゃないかという御指摘がありました。

具体的にチョン先生の昨日の御発表を踏まえてのお話だったと思いますが、こういう幾つかの個別の発表にかかわるものについて、それぞれの発表の先生から、もしきょう何か御返答がいただけ

ればいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

チョン・ダハム氏——お二人の質問は、相通じるものだと思いますので、村井先生と藤田先生の質問を一つにまとめ、やや長めにお答えしたいと思います。

まず（私の報告が）朝鮮中心の視点ではないかという点について申し上げます。村井先生が日本社会における日本の固有性の問題に触れつつ、その実態が何かを確認するのは困難だという話に、私も全く同感です。

私は報告の中で、女真族と対馬を（報告で述べたような形で）把握していたのは、私ではなく当時の朝鮮の支配層であったという点を、はっきりと言っていますが、朝鮮が対馬や女真の居住地域を自身の領土だと考えていたとはまったく述べていません。「想像の位階秩序」という言葉を用いています。

私の研究は、朝鮮中心的な秩序がどのように作られたのかを明らかにすることが最終目標ではありません。明中心の中華秩序が、明一国によって動かされているものではなく、朝鮮、幕府、ベトナム、琉球といった小さな中心が連動しつつ動かす秩序であり、またそれにとどまらず、その中で通常は最も最下層に位置する種族と定義されている女真や対馬までも、その中で重要な役割を果たしたと考えています。

ただそうした内容に行き着くためには、まず朝鮮という小さな中心がどのような役割を果たしたのかを論じなければなりません。またそうした朝鮮の役割を、ベトナムや琉球、幕府の例と比較する作業も必要となるでしょう。私は現在、明と朝鮮と女真という三つの勢力が絡み合い、複雑なダイナミズムを形成していく過程について論文を書いています。現時点ではその内容を公開するこ

とができません。できるだけ早く完成し、お見せできるようにしたいと思います。

次にもう一点ですが、私の敬差官の論文を読んで、次のような質問をする人がいます。「(朝鮮は)明の影響を多く受けたというが、明の影響をあまり受けなかった日本の場合は日本型の華夷秩序を持っていた。同様に、朝鮮も朝鮮型の華夷秩序を持っていたと考えることができるのか」という質問です。村井先生や藤田先生がそうした視点だということではなく、他の人からそういう質問を受けるとのことです。

これは、東アジアを非常に中国中心的に見る視点だと、私は考えています。なぜなら小中華を論じる際、中華の影響力が多かったか、少なかったのかを秤にし、小中華形成の可能性を計量化しているからです。中華の影響力が少なければ日本のように小中華が可能であり、多ければ小中華が可能でないという視点ですから。これとは逆に、小中華を論じる際、中華の影響力を極力避けつつ、朝鮮の文化的先進性のみを強調する傾向が、韓国の研究者の間では一般的です。

この二つの立場は互いに異なっているようですが、共有点があります。つまり歴史の理解において、ある権力の中心のみを強調しすぎるという点においてです。中国であれ日本であれ韓国(朝鮮)であれ、これらは異なった視点のように見えますが、それぞれを中心のみでしか論じていないというところでは同じなのです。だとすれば、中華と小中華とは、相互に衝突するものだと決めつけることはできません。

私の視点は、そうした二つの問題点を認識し、それを越えようというものです。流用(appropriation)やprovincializeという特定の概念を用いるのは、そうした理由によるものであることを、最後に申し上げておきたいと思います。

藤田高夫氏——ありがとうございます。先ほどの村井先生の御指摘に対して、今のチョン先生のお話の中にも、朝鮮という事例の中からではありませんけれども、それに対するお答えを汲んで、問題点を御指摘いただいたと思います。

今回のシンポジウムでは、この周縁と中心の概念というものを「越・韓・琉」でやりましたが、もう皆様もお気づきのように、実は隠れた主人公は中国ですね。この中国に対する独自性というものを何らかの形で見出そうとしてきたわけですが、村井先生の御指摘の中でやはり一番重いのは、ほかに参照系がない以上、つまり中国以外の参照系がない以上、独自性ということをするときに、何を以て独自性と考えるのか、という点です。それぞれの研究において、中国の影響、中国との関係を念頭に置きながら、そうした御指摘があったと思いますけれども、この中心と周縁という見方が、中国との関係、中国ファクターとも絡み合わせて、御自身の研究に中国ファクターとの相対化ということに関して、どのぐらい意味を持つのか、可能性を持つのかということについて、お考えを伺えればと思います。

桃木至朗氏——今のチョン先生がおっしゃったことにとっても近いことを言わせていただきます。この問題を考えるときに、それからもう一つ威張って言わせていただくと、東南アジアというのはベトナムを含めて、ごらんになったようにすごく研究は遅れているし、資料も少ないのですが、その分こういう理屈の議論を散々やってきました。

例えば、主体性か自立性か、こういう議論を東南アジア史は50年前もやりました。そのほかも含めて、チョン先生とも昨日からいろいろお話ししているんですが、すごくきつい言い方をあえて許していただければ、東北アジアはまだすごくプリミティブな議論をしているな、と感じました。

中心、周縁というのは、それはある力がよそよりも圧倒的に強いということがある以上、しかもお互い孤立して動いていないということがある以上、中心、周縁という意識を持たずに研究をするということはありません。

ただそうした場合、中心に対抗して周縁をもっと見ようとするやり方は、ましてや村井先生がおっしゃったようにタマネギの皮むきにしかありません。

一つの周縁を本質主義的に、エッセンシャルリズムとして定義することは不可能です。それは同じように中心も定義することが不可能だと思います。

ですから、それと違ったやり方で周縁を説明しなければならぬ。そのときに私は主に二つのやり方があると、別に私の発明ではありません。東南アジア史などでも1970、80年代に、それ以前の各々が「一国としてのうちの独自性」を主張するのを越えよう、東南アジアとして、地域としての独自性を考えようということになったのですが、それもやっぱりだめだったんですね。東南アジア地域研究の黄金時代がそこにあったのですが、もうそれも過ぎました。

ですから、やっぱり周縁である側が、自分の独自性というのを自分だけで、本質的に定義しようとしたら絶対失敗するんです。違うやり方を考えなければならぬ。チョン先生がおっしゃったのはそういうことだと思います。

じゃあ何ができるのか。我々は、少なくとも二つのことを共通の武器として考えなければいけないだろうと思います。

第一は、その中心から来るさまざまな要素、及びその他の雑多な要素ですね。確かに中心からは来ない要素というのは当然あるわけです。日本独自とか、日本にしかないという要素は当然あるだろうと思います、要素としては参照系ではない

ということです。

それらを組み合わせて、組み立てるやり方ですね。これは一般にパッチワークだろうと思います。ただし周縁だからこそ、中心の状況にも規定されて、ときどき中心以上に中心らしくやろうとするのは当然あります。このあたりを、まさに今回いろいろな形で、多くの方が問題にされた。例えば、同じ時代の中国を真似るとは全く限らず、わざと違う時代の中国を持って来る、ということは、少なくとも無形文化の世界ではたくさんあると思います。

宮殿建築などでもしそれが言えるとしたら、とても面白いことです。私はハノイのタンロン（昇竜）でも言えると思っていますが、わざと違う時代のものを持って来る。しかも周縁の場合ですから、別の面ではすごく誤解をしたり間違えたりと、いろんなことがありますから、とても複雑になります。ただそれらの組み立て方をどうやっていくのかということに、中心と違う独自性があるということです。東南アジアについては、アメリカ人が随分この議論をしていますし、これはやはりあることだろうと思います。参照系は中心からきていても、ただその要素を組み立てるやり方が違っているということです。

それから二番目に、中心から物を見たときのいけないところは、中心からでも周縁は見えますが、周縁の向こうにあるものは見えない、という点です。周縁の向こうにさらに何があるのか。日本史が難しいのは、島だから向こうへ行くと太平洋しかないということだと思のですが、例えば女真の世界の向こう、あるいはベトナムの向こう、そういったところを当然見ていかなければならない。それを例えばベトナムのナショナリストが怠ったために、うまくいかなかったということがあります。そういう広い目で考える。これはもちろん簡

単なことではありません。違った資料を読まなければならない、ということにもなりますから、簡単なことではありませんが、絶対やらなければならない。

そういうところまで、もう我々は明確にきていて、その上でこれらを当然の前提にした上で、具体的に何をやるかを議論すべき段階なのだ、と私は考えています。

藤田高夫氏——ありがとうございます。

どなたか、いかがでしょうか。

豊見山和行氏——中国ファクターというか、中国の圧倒的な影響はあるわけですが、ところがその14、5世紀、琉球は国家的なものを整えているときに、中国のシステムの援用というか模倣をするわけですが、それと同時に在地の仕組みも残しています。それを独自というかどうかは別としても、そのあり方、両方の組み合わせによって、それが独自のものになるのか、あるいは中国にかなり傾斜したものになるのかというふうに思うわけです。

少し関係のある問題ですが、王権ができるとその王権が、例えば琉球だと日本という仕組みを借りたり、あるいはまねたり、それから中国のものをまねたりします。やはり後発国というのは、そうならざるを得ないのではないかと思うんですね。その先発の仕組みを借用しながら組み立てていく。琉球は、薩摩に征服された後、薩摩の用語を盛んに使います。評定所なんていう完全に日本の用語を使ったりしますし、さまざまな裁判の仕組みも日本の仕組みを借りたりする。しかし中身が一緒かということ、違う点があるなど、中心そのままではないということも考える必要があると思います。

琉球の場合、特に島々、島嶼支配のときに、離島支配という問題が大きいのではないかと思うんですね。大陸の中でのその権力と、島ででき上がっている権力との違いというのがあるように思い

ます。

大枠の中国の秩序にのっとっているようなレベルの上層の外国人と、島々を統治するような秩序と、そういう幾つかの外交秩序というか、統治秩序というか、そういうものが上下に併存しながら存在しているのではないか。

昨日、夫馬先生が盛んに批判していましたが、冊封体制論という中国がつくった秩序によって、東アジアがすべて動いていたかのようにとらえるのは問題だというのは、現在の研究ではほぼ了承されていると思うんですね。冊封体制ですべて説明しきるといのは卒業したいんじゃないかと思うんです。

それにその冊封の持っている力というのは、国々によって受けとめ方が違うのではないか。琉球が中国の冊封を受けるとき、その権威のあり方をどう受容するのか。それから朝鮮王朝がどのような形でその冊封を受けとめるか。それらはやはり、国々の置かれた政治状況や、国際関係の位置づけなどによって違ってくるのではないかと思いますし、さらにその国独自、琉球だと琉球独自の島を支配するとき、その地方、島々にはまた土着の小さな権力があって、そこを統治する仕組みが、また別の形でできあがってくる。それらが積み重なった形で、外交秩序というのはでき上がっているのではないか。それが反発したり、うまく調整されたりしながら進んでいるんじゃないかなというふうに思っています。これまでの大枠での中心、中国の持つ力だけでとらえる方法はもう卒業して、今後は、それぞれが中国とつき合っていく中で、どのように新しいものをつくっていくのか、あるいは変容させながら独自のあり方をつくっていったのか、そういうやり方になっていくのではないかと思います。ちょっと雑駁ですが、以上です。

李成市氏——中国ファクターの相対化という問題

について、今、豊見山先生のお話を伺いながら、ちょっと申し上げたいことがあります。中国中心主義、例えば「冊封体制の卒業」と表現されましたけれども、例えば冊封体制論、東アジア世界論の原理は何かというと、中国皇帝と周辺諸民族の君長との間に、官爵を媒介にして君臣関係が結ばれると、その政治性によって、中心の文化が周縁に伝播する。これが冊封体制の基本的な考え方ですね。要するに、中心と周縁が個別的に中国皇帝と関係を結ぶことによって、文化が伝播、受容される。

これが基本的な考え方ですが、具体的な事例で東アジアを見ると、例えば仏教、日本の仏教は西嶋（定生）先生の構想によると、中国から来なきゃいけないんですけど、百済から来るんですね。

それから、日本の国語学者もやっと認めるようになりましたけれども、漢字文化は中国大陸から来たと思いついてきたけれど、最近、朝鮮半島から出てきた出土文字資料を見ると、日本の変容した漢字文化というのは、大体、百済や新羅、あるいは高句麗にあって、中国大陸から来ようがないわけです。

だから、西嶋先生は必死で、親魏倭王とか、後漢時代の日本列島との外交関係での漢字の受容などを考えようとしたわけです。偶発的にそういう外交を結ぼうとすれば漢字は必要だけでも、日本列島内の漢字文化の受容というレベルとは全然異質な次元のことを、一生懸命やってきたわけですよ。

重要なのは、西谷先生のおっしゃったように、周縁と呼ばれた諸地域間交流が想像以上に大きい役割を果たしているということです。例えば日本の中国化、仏教でもいいですが、西嶋先生の東アジア世界論の指標は、漢字、儒教、律令、漢訳仏教ですよ。この四つの指標は、中国皇帝との二

者関係ですべて日本に入ってきたわけではない。最近、儒教も朝鮮経由だということが、だんだんわかってきています。

要するに周縁諸地域間交流が、さまざまな契機でそういったもの、「似て非なるもの」を入れてきたりしたわけです。それらを「中国ファクター」と言って、中国に参照系を求めるから、わけのわからない議論になるわけで、それぞれがいろんな経路をたどってきているわけですよ。まずそのような相対化の仕方があるのではないか。

私は事例研究でやってみたのですが、例えばその参照系という言葉が村井先生がお使いになりましたけども、日本は670年ぐらいから700年の間に、徹底的にその四つの指標を中国化しようとするけども、参照系としての唐といっても、このころ唐とは一切の交渉がないわけです。ならばそれは一体どこから来たのかということ、唯一の参照系は新羅なんですよ。新羅と同じ時期に同じことをやっているとしたら、それは単に新羅から来たというだけでなく、自分たちは百済王権を抱え込んでしまったから、新羅以上の中国化をしなければいけないという、そういった政治志向性が中国的なものを求めたりと、全然契機が違うわけですよ。それを非常に単純化して、中心から周縁へ、中国から日本へというベクトルでしか見てこなかった。

今回のシンポジウムでも、大変刺激的なのが、やっぱり帰るところ西谷先生がおっしゃった周縁諸地域間交流の豊かさ、それが何をもたらしたのか。この地域の独自性というのは、そういうダイナミズムを今まで無視してきた。

今回のシンポジウムでは、議論として統合はされてないけれども、そういう具体的な事実を突きつけたところにですね、いろいろ素材があって、それをどのように言語化し議論化していくのか、その問題はありますけど、今申し上げたよ

うな相対化もあるのではないかと思うわけです。

藤田高夫氏——ありがとうございます。

ほかの先生方からも御意見を伺いたいのですが、実はもう一つ、主催者からおおせつかっている課題がございます。

それは、今回のシンポジウムでは時代的にはずいぶん古いところからありましたが、これまでの企画の多くは、近世に関する研究を含んだ報告でした。それを踏まえて、各セッションの企画者から、近世への視点ということについて御発言をいただきたいと言われていまして、最初の政治のセッションから、順に御発言をお願いしたいと思います。

篠原啓方氏——ありがとうございます。

私は朝鮮古代史の専門ですので、私がやってる領域から見てどういう印象が持たれるのかという、そういう点についてお話ししたいと思います。

私は2010年の7月、韓国のソウルにおいて、朝鮮王陵が2009年に世界遺産に指定されたことを契機にですね、王陵、朝鮮時代を中心とする近世期の王陵を中心とする周縁との比較というシンポジウムをさせていただきました。

その中で、ベトナムの阮朝の皇帝陵、琉球の王陵、それから朝鮮王陵との比較、そして日本の大名墓なども取り入れてお話を伺ったわけですが、それぞれ独自の要素が見られるなかで、儒教的な要素がそのときかなり入ろうとしている。入ろうとしているんだけど、いっぽうでそれを入れようとしないうえに、互いにきつ抗するような形で表れてきている。そういうことが、報告者のお話から得られました。私がそのときに考えたのは、やはり共通して何かかなり意識されている、それは中国ということよりも、そういった思想、それを中国的な要素というふうに言えると思うんですけども、それがあつ程度、自分たちの

考えの中であって、それをどう受け容れるべきなのかという意識がかなり大きいのかなと、それが恐らく近世のあり方なのかなというふうを考えました。

ただ私が考えている古代というのは、周縁、あるいはさらに外の領域がですね、そこまで中国のものというものを意識しなければならない、あるいは意識しようという、方向性が、まだまだ希薄だったのではないのか。中国の国内では、自分が世界の中心であり、それを当然、周辺が受け入れるものだというふうに考えている思想が既にでき上がっていますけれども、実際に自分たちの周辺で本当にそれが受け入れられているのかどうかを確認し、見せつけていく、強要していく、中国側からどんどん発信していく、そうしなければならないプロセスがあったのではないかと思っています。

ですから古代というのは、中国においては唐が成立することによって、大まか、例えば日本が律令制によって大変革を起こすような状況が出てくる。そうして中国というものを意識せざるを得ないような環境が、徐々に、さまざまな要素において整っていく、それらがある程度まとまってくるというのが近世なのかな、その流れをもう少し、ですから中国が自分たちのすごさというものを、もちろん周縁は知っていると思うんですけども、そのいっぽうで中国側から、それらを体系的に受け容れさせようとするという動きもまたあったのではないか。その辺を、古代から近世に至る過程で我々のやっている地域、あるいは東アジア全体を考える上で、もう少し見ていってはどうか、そういうことを考えました。以上です。

藤田高夫氏——ありがとうございます。

岡本さん、お願いします。

岡本弘道氏——第2部（外交）は唯一、すべてが

近世期にかかわる報告だったこともあり、そういう意味では近世についてもいろいろな見方に触れることができたと思います。その中で、やはり基本的には中国に由来を持つ外交秩序の概念がそれぞれの国の文脈の中で、取捨選択されたり換骨奪胎されたりしながら受け入れられて、同時並行で利用されている。独自というのをどう考えるかというのはあると思いますが、中国由来であれば、それはどこまで行っても、どういうふうにも適用しても中国ファクターだということの方が問題なのではないか、ということを感じました。

どういうふうそれが適用されたのか、どういうふう解釈してこのように用いたのかというところで、やはり考えていかなければいけません。それを「やっぱり中国由来じゃないか」と言ってしまうのは、むしろ解釈者の側の問題なんじゃないでしょうか。外交について言えば、特にチョン先生の報告などは、中国との外交関係がまずあって、その中でさらに朝鮮が隣接する地域とどのように交渉したかという話ですので、中国の影響を排除することはできません。それでもやはり近世になってくると、それぞれの国が描く世界はある程度はっきりした形で固まってきます。近世の東アジアというのは基本的にその中国由来の考え方というもののみがフルセットで、むしろ中国から持ち込んだフルセットによってそれ以前に個別に存在していた現地的な適用のあり方を再構築したようなところがあります。一方でそれぞれの国が持つ個別具体的な環境条件とか、社会状況とかいったものが体系化されていない、もしくは可視化されていない。解釈者の側が自覚してしてないだけで、やはり国ごとによって、それぞれの体系というものがあられるわけですが、さきほど参照系とおっしゃったように、やっぱり系として明確に提示されないとそれが見えてこない。それに対して、

実際にはそれがどのように適用されているかというところから、研究者の側がそれぞれの地域とか状況に即して、「それぞれの体系」を再構築していく必要があるのではないかというようなことを、村井先生のお話を聞きながら考えました。

それがまだなかなか進んでないというのは事実ですし、具体化していくのは、やはりまだこれからだと思います。外交セッションのコメントでは非常にきつい御指摘を受けたりもしましたが、はっきりと明示化されて、あらかじめ提供されている中国由来の参照系というものに、研究する側があまりこだわり過ぎるというのはやはりまずいのではないかということですね。

中国での解釈とか位置づけとは違うものが出てきても、やっぱり中国由来じゃないかということで、またラベルを貼り直してしまうようなことをやってきたのではないのでしょうか。恐らくはそういう反省もあって、文化交渉学教育研究拠点の中でこういったプロジェクトが進んできたということだと思います。成果としてはまだ十分に明確な形は出てないですけども、このような方向で進めていけば、今言ったような方法で、いまだ明示化されていない、それぞれの国、地域の系というものを多分描くことができるのではないかと、というふうに考えています。長くなりましたが以上です。

西村昌也氏——ベトナムを例に、というかベトナム、琉球、それから朝鮮は、明並行期以降、中国化の度合いというものがやっぱり高まっていて、この儒教を中心とした影響が大きくなっており、今我々が考えている中国化というイメージはそれにある程度基づいていると思うのですが、そういう意味で、私は15世紀以前のベトナムは、それ以降のベトナムとかなり違っていたと思っています。これは恐らく中世日本と、近世日本の違いといった議論とつながってくると思うんですが、そうい

う意味では、我々どうしても、現在の我々の社会からさかのぼって、見つめているところもありますので、一回そういうところからも少し離れて、近世以前のアジアや、近世以前の各国をきちんと見直していくことが必要なのではないかと考えています。

藤田高夫氏——ありがとうございます。

私に与えられていたコントロールすべき時間はもう過ぎてしまっているんですけども、せっかくですから会場フロアからの、お二方だけ、御意見でも御質問でも構いませんので、もしありましたら受けようと思いますけれども、いかがでしょうか。

佐藤雄基氏——東京から参りました佐藤と申します。

これは質問と言いますか、ちょっと教えていただきたいことです。私、日本の中世史を勉強しております。

ベトナムの報告の中で、西村先生の話をお伺いすると、チャンパの影響というのが特に11世紀、15世紀のベトナムで大きいファクターになっているとありました。

先ほどのコメントにありましたように、周縁のさらにその先にあるもの、桃木先生のお話にも通じると思うんですけども、それと同じ問題が朝鮮にもあるのだろうかという点に興味があります。朝鮮の先は日本、もしくは北方民族、朝鮮半島の北方にある遊牧民の物質文化や政治制度の影響は、中国とは別の形で朝鮮に向かっていったのかという点について、もし何かありましたら、朝鮮史の先生方に教えていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

藤田高夫氏——どなたか、どなたでも結構ですが。
ジョン・ダナム氏——まず今のご質問は、恐らくは朝鮮時代の社会を儒教国家のイメージで捉えて

いたからこそ出たものではなかったかと考えます。これについては、韓国の歴史学者自身が「(我々は)なぜ朝鮮時代を儒教社会としてのみ捉えてきたのか」と自問する必要があるでしょう。

近年の視点では、朝鮮時代は儒教社会一色、高麗時代は仏教社会一色ではなかった可能性が高いと考えられています。また朝鮮という空間を半島の中に収めてしまって、その中で儒教や仏教というイメージをお持ちであるのかもしれませんが。ですが例えば、朝鮮の中でも、平安道や咸鏡道といった北朝鮮側の地域では、女真の文化の影響、あるいは風俗といったものが、割と近代まで残っていた地域なのですが、そういった部分が明らかにあります。その空間をまた別の形で切り取れば、恐らく朝鮮にしばられない別の視点、影響関係が見えてくるでしょう。これが一つのお答えになったと思いますが、そうした異なった視点からもごらんいただければと思います。

藤田高夫氏——ありがとうございます。それでは最後に、陶先生どうぞ。

陶徳民氏——私もこの問題に興味を持っています。中国自体が、実は一つの生きものとして、歴史的な生命体として変化しており、また各時代の様々な異質なものを抱え込んで、あるいは統一を果たし、あるいはまた分裂するそういう現象を、中国自体に対する分節化によって、中国の相対化もはかれると思います。またそうした異質文化は、各時代における中国の辺境と、各地域とのつながりもあります。中国がずっと持続しているとか、世界唯一の断絶性のない帝国だとよく言われていますけれども、実際には、たとえば元の時代、既に断裂が生じています。そうでなければ、中国の有名な劇作家である関漢卿が、なぜあのような亡国の痛恨を訴える雑劇を作ることができたのか、という問題もあります。

もう一つ、文明史あるいは文化史的に考えると、今の主権国家のメンタリティーから脱却しなければなりません。例えば、中国の北京大学の有名な歴史家張岱年が中国哲学史を語る時には、中国のインド化という言葉を使ったことがあります。つまり仏教の中国伝来・浸透を中国のインド化、あるいは先ほど李先生が言った、古代日本の百済化、あるいは近代東アジアの日本化、そういう現象をもっと気楽に考えてもいいんじゃないですか。つまり各時代は、やはり一つの力強い影響源によって彩られていますので、文明史、文化史で考えると、ちょっと政治から離れて、主権国家の立場から離れてみて、もっと気楽に眺めてもいいのではないかと思います。

藤田高夫氏——ありがとうございます。

さらに突っ込んでいくべきところはたくさんありますし、最後の総合討論の時間を比較的しっかりとったのですが、既に30分超過してしまいました。遠方からお越しの先生方もいらっしゃいますし、時間もつきましたので、この2日間にわたるシンポジウム、これにて閉会したいと思います。

どうも、大変長時間にわたり御参加いただき、何よりも貴重な報告、そしてコメントいただいた先生方、本当にありがとうございました。

本日は、これにて閉会ということにいたします。どうもありがとうございました。